

### 株式会社ベックスコーポレーション

〒102-0074 東京都千代田区九段南2-7-6 6F TEL:03-3239-8721 FAX:03-3263-2192 MAIL: info@beccs.co.jp

## 心志有情

9月に入り、今年も残り4か月を切った。2023年は「1」の年である。物事に集中して取り組んでいくことで大きな成果を手にすることが出来る年だ。私としてはやはり書籍の出版がその一つと言えるだろう。昨年取り組み、これで3冊目の出版となる。1冊目では自己を知り、2冊目では相手を知らすためのバイブルとなるようバイオエネルギー理論の基本を盛り込んできたが、3冊目ではその基本を学び活かしてきた実践方法を株式会社日本レーザの近藤宣之会長とともに書籍にまとめることとなった。

近藤会長には会員として約20年バイオエネルギー理論を学んでいただけで、長年一緒に経営者セミナーを行ってきた仲だ。そのセミナーに参加し、バイオエネルギー理論を学ばれたようになった会員の方も数多い。日本レーザは、2011年の第1回「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞の最高賞である「中小企業庁長官賞」を筆頭に、これまで多くの賞を受賞しておられる。社員との関係性を密に構築し業績をのばしてきた会社だ。近藤会長は一昨年の秋



(株)ベックスコーポレーション  
代表取締役会長  
香川 哲

に、各分野における顕著な功績のあった方へ授与される旭日単光章（きよくくじつたんこうしょう）も叙勲されており、まさに輝かしい経歴の持ち主だ。だが、すべてが順風満帆だったわけではなく、その境地に辿り着くまでには様々な困難に立ち向かい乗り越えてきた。だからこそ、今の日本レーザがあり、近藤会長がある。その近藤会長が社内でのようにバイオエネルギー理論を活かし、社員との関係構築を図ってきたか、そして、実践していく際のバイオ別のポイント等についても書籍では述べる予定である。特に人を大切にする経営の根幹となる「経営手法」についても注目してもらいたい。3冊目の書籍『人を活性化させる経営』は、10月11日に発売予定なので、ぜひ楽しみにして欲しい。

この書籍の中でも触れているが、会社を経営していくうえで、社員との関係構築が上手いかず悩んでいる経営者は多い。その問題を解決するためには、まず自分の利害関係者をよく理解し、周り自分と思考回路が180度異なることに気づく必要がある。自分の周りには、私たちは社員、顧客、友人、家族、すべてが利害関係者となる。利害関係者は自分にとつての潜在エネルギーとなるため、「1」の人なら周りは「5」、「2」の人なら周りは「3」、「3」の人なら周りは「4」というように、周りは自分とは違うバイオの世界にいるのだ。見えていない世界が違えば、思考や行動も当然違ってくる。従って、自分の思考とは逆の言動となるので、周りを理解し実践することは修行となる。具体的な方法としては、『利害関係者の資料』の【周りの人】を【対象者の名前】に変えて読むと、対策が見えてくるはずだ。自分の課題が改善できたときこそ、自分が大きく変わる。

そして、接する利害関係者がどのような人物なのかも改めて見てほしい。人は自分が思っている以上に周りからの影響を受けやすい。社員や家族が活性化していない原因は、全てリーダー（自分）にある。自分が活性化すれば、社員も家族も自然に活性化してくる。周りは気づきを与えてくれる存在なので、周りの状況を常にチェックし、活性化状況を把握してほしい。

#### 【利害関係者を見極める際のポイント】

- 「1」 6 積極的で自力で行動する人
- 「2」 5 素直で謙虚な人
- 「3」 4 真面目ではじめがある人
- 「4」 3 明るく前向きな人
- 「5」 2 優しく人柄のよい人
- 「6」 1 上品で信頼性がある人

現状を変えるためには、まず自分が変わる努力をすることが大切だ。そのためにも言動、思考、環境等、様々な視点から自分を見つめ直す時間をとることをおすすめしたい。

「自分が変われば周りが変わり、未来が変わる」

未来を切り開く鍵は、常に自分が握っている。

また、来年は「2」の年となり、「1」の年の成し遂げたことを通じて、相手のために喜ぶことをしてあげること成長していく年である。

『相手の喜びが自分の喜びである』を実践してほしい。弊社としても皆様により良いものを提供できるよう、全力で取り組んでいく所存だ。

# 最先端の加工技術で

# 世界で次も期待される存在を目指す



## 株式会社テクニスコ

代表取締役社長 関家 圭三氏

バイオナンバー

341  
431

父の会社からの独立を決意し、  
会社を発展させてきた関家社長の思いとは

### 関家社長の生い立ち

株式会社テクニスコは、昭和45年（1970年）2月に祖父・三男氏（バイオナンバー134）が創業。精密加工部品を製造している。関家社長は、精密加工装置を製造する株式会社デイスコの取締役を兼任しながら、平成21年（2009年）にテクニスコの代表取締役社長に就任した。元々デイスコの子会社という立ち位置だったが、平成26年（2014年）10月に完全に独立。令和2年（2020年）に創立50周年を迎えた。

関家社長は昭和40年（1965年）に関家家の長男として生まれた。父・憲一氏（バイオナンバー66）が当時の第一製砥所（現・株式会社デイスコ）・広島工場に勤務していたため、呉市に住んでいたが、本社への異動をきっかけに3歳の時に引越した。以来東京で育った。幼い頃は活発的な姉とは違い、よく母・英子氏（バイオナンバー112）の後ろに隠れている引つ込み思案な少年だった。両親はとても優しくだったが、父はこうだと思えば一直線に突っ走っていく性格で、よく様々なことに対して「これはこうあるべきだ」と意見がはつきりしていたという。幼い頃から、「いずれは圭三も社長になるのだ」と言われていたため、中学生の頃には父の会社を継ぐ意志があった。大学は慶應義塾大学理工学部に進学。学部を指定されることはなく、「好きなことをやりなさい」と父に言われていたため、得意な理科系を選択した。経営工学や会計学の授業の中で経営上のさまざまな数字をコンピュータで処理していく技術を学んだ。

大学卒業後は、他社で修行をするか、外国へ行くかと言われ、迷わずアメリカへ留学することを決意。2年の期限付きではあったが、スタンフォード大学大学院エンジニアリングスクールへ入学した。アメリカ・カリフォルニア州シリコンバレーにはデイスコのアメリカ支社があり、期限をむかえて大学院を辞めた後もそのままアメリカに滞在し、入社した。アメリカ支社では、デイスコが日本で製造した装置をアメリカで販売・サービス提供しており、当時は日本の海外営業との窓口を担当。2年働き、平成3年（1991年）26歳で日本へ帰国し、デイスコ本社へ配属になった。

### デイスコとテクニスコ

デイスコ本社では経理部へ配属。ちょうど社内管理会計を立ち上げるプロジェクトが始まるタイミングで、そこに任命された。管理会計を担当するということは、社内全部の部署を知ることになる。「勉強のためにやりなさい」と父に言われているのだと関家社長は感じたそう。各部署の幹部の面々と打ち合わせを行い、それぞれの部署の役割を全部把握するのは大変なことだったが、とても勉強になった期間だったと関家社長は語っていた。

現在はテクニスコのトップとして采配をふるう関家社長だが、経理部時代は全くテクニスコとは関わっていなかった。もともと関家家の別会社として祖父がつくった会社だったが、親戚のおじたちが交代で社長を務めているグループ会社といった感じで、何をしているのかは全く分かっていなかった。平成7年（1995年）に取締役に就任し、経営会議などでテクニスコの話をするようになった。当時はデイスコの売上はおおよそ300億円、テクニスコが30億円弱といったところで比率的にはそこまで小さくなかった。だが、そこからデイスコは業績をどんどん伸ばし、売上高1000億円を超える大企業へ成長していった。かたやテクニスコはずっと30億円の壁を越えられなかった。そうなるかとテクニスコの立ち位置も変わってきた。また、平成20年（2008年）9月のリーマンショックをきっかけに更に業績が低迷していた。関家社長は建て直しを命じられ、平成21年（2009年）よりテクニスコの社長を専任するようになった。

社長に就任し経営に関わってみると、テクニスコの技術の魅力に気づいた。とても面白いものを持っていると心が躍ったそう。だが、周りは売上の成長のない企業のことをなかなか真剣には考えない。デイスコの経営会議の中でテクニスコの話になると、他の役員たちにもう解散してしまえと言われてしまう。それならもうデイスコから独立し、自分達でやってみよう。いずれはデイスコのように上場を目指そうと決めた。関家社長は平成26年（2014年）9月に26年間勤めたデイスコを退職。翌月10月にテクニスコの株式を全て買い取り、デイスコから独立した。

# 社長としての葛藤

独立してから7年後の令和3年(2021年)、テクニスコの売上高はかねてより目標としていた30億円を突破。現在50億円を超えるほどに成長しているが、決して全てが順調だったわけではない。まず大きな問題だったのが、人間関係の対立だった。テクニスコの社員は、元よりテクニスコに所属しているプロパー社員と、関家社長のよう

にデイスコから転属された社員の2種類に分かれる。以前は上の役職はデイスコから送り込まれた人が務めることが多く、プロパー社員はなかなか役職者にならない体制だった。また、デイスコからきた社員には、元々親会社でやってきたやり方や認識の違い等が当然あり、双方の思いが上手く馴染むことなく長年火花が散っていた。社員だけでなく、役員も皆それぞれ衝突したり、悩みを抱え葛藤していたと思う。その現状をどうにか変えたかった。プロパーという役員は吉岡専務は新卒で入社し、当時では唯一役員に上がった人物だ。彼の言動がテクニスコのプロパーたちを動かす原動力だと直感した関家社長は、吉岡専務をキーマンとして非常に大事にした。だが、その意図が上手く伝わらず、それを疑問に思う人も当然でてくる。片方だけを大事にしたいわけではもちろんなく、同じ目標に向かって切磋琢磨し合う仲間なのだから、お互いに協力し合って成長してほしい。そう考える関家社長は双方の間に立ち、試行錯誤の日々を送った。トップでありながら皆の仲介役に徹し、10年かけて少しずつしがらみをほ

どいていった。社長なんてカリスマ性のある人じゃなければ仲介役しかできないよ」と関家社長は笑って話してくださいましたが、社長ご自身の忍耐力と持ち前の明るさがあったからこそ可能だったことだろう。創業から50年以上経つ会社だからこそ、当然単純ではなく、複雑に糸が絡み合っており、それをどうやって解きほぐしていくかを考えていく中でバイオエネルギー理論に出会ったことはすぐ助かったとおっしゃっていた。

## バイオエネルギー理論との出会い

きっかけは勘違いだった。テクニスコはバイオサイエンスのガラス部品を扱っていたので、セミナー

の案内に記載されていた「バイオエネルギー理論」という言葉を目にしたときに何か仕事のきっかけになるかもしれないと思いセミナーに申し込んだ。最初は完全にバイオサイエンス分野の話だと思っていた。だが、実際に話を聞いてみると全然違う内容で驚いたが、面白いと思った。怪しいかもしれないと感じつつ、香川会長が人の事をズバズバ当ていくのを見て興味をもった。当時、香川会長とセミナーを開催していた、株式会社日本レーザの近藤会長が、テクニスコの村上専務と業界の繋がりで見入会を決めた。

## トレーニングの効果

最初の数年は、正直トレーニングが嫌でしかなかった。トレーニングが苦痛で毎日できず、ミーティングで達成状況を訊ねられると100%と言えないことが多く悔しかった。読むだけでそんなに変わるのか、と疑っていた。だが、理解しながら読んでいくのではなく、頭にイメージをいれていけばいいと教えてもらってからは、スピードが上がり、トレーニングが苦痛ではなくなった。そうなるから、だんだんと変化が出始めた。昔は何かトラブルがあるとすべて人のせい何か他の出来事のせいにしていった。当時は人のせいにしていてという意識はなかったが、自責はありながらも他の人も悪いんだ、といった感覚だった。そこから、「主体性」が重要なのだと理解することができた。

「自己責任 開き直って 腹くくれ」  
トレーニング手帳にも記載されているこの言葉を初期の段階で香川会長に言われ、自身がまだどこかで腹をくくれていることに気づかされた。関家社長の中で何が吹っ切れた。新しい事業に取り組むときも、以前は誰かがやりたいならやればいいという気持ちでいたが、自分の責任でやるんだと意識が変わった。この言葉に背中を押され、変化があったのは関家社長だけではない。テクニスコでは役員・幹部社員を中心に8名の方に香川会長との研修を受けてもらっているが、中でも吉岡・村上両専務に変化があった。特に村上専務

## 今後の目標

今年令和5年(2023年)7月26日、テクニスコは東京証券取引所スタンダード市場に上場を果たした。関家社長が携わる以前から、二度ほど上場を目指して動いていたことがあったが実現できておらず、今回はテクニスコにとって三度目の挑戦での悲願だった。今後は、世界に求められるメーカーとして認識してもらおうのが一つの目標だ。目標達成には現在シンガポールで量産準備しているシルバードイヤが鍵を握ると関家社長は考えている。ハイテク部品の熱を逃がす冷却用パーツ・ヒートシンクの材料として優れた熱伝導性と熱膨張率を誇るシルバードイヤは、これまで世の中になかった素材であり、絶対に良いものだと思える。だが、コストが不明でまだまだ課題が沢山あり、改善していかなければならない。その問題をクリアにし、欧米を相手に勝負していきたいと関家社長は語る。

しかし、テクニスコの管理職は関家社長とほぼ同年代の50代後半が多く、年齢層に偏りがある。会社の中心として任せられる次の世代がないのだ。現在、制度設計の見直しに取り組んでいるが、上場することによってより働きやすい環境を作り、抜けている中間層を補い育てていくのが今後の課題だ。他社にはない独創性を活かして、上場の夢を叶えたテクニスコの可能性は無限大に広がっていく。

- 所在地/東京都品川区
- 創業/昭和45年2月
- 業種/精密加工部品製造メカ
- 社長/関家 圭三氏 (1965年3月21日生まれ)

バイオナンバー

341  
431

<https://www.tecnisco.com/>

# 史上2人目の七冠を達成し、八冠獲得に挑む将棋棋士

藤井氏は、2002年愛知県瀬戸市で生まれた。将棋との出会いは2007年夏の5歳のとき。母方の祖母から将棋の手ほどきを受けたのがきっかけだった。瞬く間に将棋のルールを覚えてしまい、秋には祖父が勝負にならないほど上達が早かった。そのため、12月には瀬戸市内の将棋教室に入会。入会時に師範の本を、まだ読み書きができないながらも符号を頼りに読み進め、1年後には完全に理解・記憶できるようになった。読み書きができなくても符号を頼りに難解な本の解説に取り組んでいる点に「4」の記憶力の良さが表れている。

2012年9月、小学4年生で新進棋士奨励会に入会。小学6年生の時に史上最年少で初段になり、二段、三段も史上最年少で昇段した。2016年、中学2年生で迎えた第59回奨励会三段リーグ戦で最終局に勝ち、10月1日付でプロ入りとなる四段昇段を決めた。14歳2か月でのプロ入りは、最年少棋士記録（従来は14歳7か月）を62年ぶりに更新。プロ入り前から史上最年少記録を達成し続けた藤井氏だが、プロ入り後も変わらず記録を更新し続けた。

プロデビュー戦は2016年12月24日に行われた、第30期竜王戦で加藤一二三氏（バイオナンバー224）との対局。無事に勝利し、公式戦勝利の史上最年少記録を更新した（14歳5か月）。この対局は記録上の最大年齢差（76歳・14歳5か月）だった。そして2017年6月に30年近く更新されなかった歴代最多連勝記録の28連勝を更新し、デビュー



師範から渡された将棋の本  
著者：所司 和晴

## 将棋棋士

## ∞ バイオ診断



442

ふじい そうた  
**藤井 聡太氏**

2002年7月19日生まれ

442

336

Kuni Furuya

文／林 恒志郎

イラスト／Kumi Furuya

から無敗のまま29連勝とした。この連勝中はメディアでも大きく取り上げられ、「藤井フィーバー」と呼ばれるほどの社会現象になり、2017年流行語大賞に「29連勝」が選ばれた。

2018年2月、第76期順位戦で10戦全勝を果たし、史上初の中学生で五段へ昇段した。また同月の第11回朝日杯オーブン戦でも優勝して六段に昇段。一般棋戦優勝・全棋士参加棋戦優勝・六段昇段という3つの史上最年少記録を達成した。記録達成が多いため、最年少タイトル挑戦及び獲得への期待が高かった藤井氏。2019年は竜王戦、王将戦、叡王戦の挑戦者決定途中で敗北した。そのため、最年少タイトル挑戦は第91期棋聖戦のみとなったが、新型コロナウイルスの影響で延期となった。無事に再開した2020年6月にタイトル挑戦最年少記録を更新。さらに、棋聖戦五番勝負では、7月に3勝1敗でシリーズを制して、タイトル獲得最年少記録を更新した。藤井氏のタイトル初獲得はメディアでも大きく取り上げられ、新聞の号外が出るほど話題になった。さらに第2局では、AIが検討した4億手の候補に挙がらない手を23分で指した。その手はAIが長時間かけて6億手を検討して、初めて最善手として出てくる手だったため、藤井氏は「AI超え」と言われ流行語大賞にもノミネートされた。この結果をうけて第48回将棋大賞で初めての最優秀棋士賞を受賞した。延期をものともせず、自身の将棋と向き合う時間としてしまう点に「4」の粘り強さが発揮されている。

タイトル初獲得から怒涛の勢いでタイトル奪取を続けた。8月に行われた第61期王位戦では、4連勝して王位を獲得し、史上最年少（18歳1か月）で王位獲得、二冠保持、八段昇段を果たした。

2021年7月、初めてのタイトル防衛戦で勝利。史上最年少で、防衛と九段昇段を達成した。9月には叡王戦に勝利して叡王を獲得し、19歳1か月という

最年少で三冠を達成した。11月の第3期竜王戦では4連勝で竜王を奪取し、史上最年少で四冠を達成。さらに竜王を含む四冠となったことで、棋士序列1位となったため、「藤井時代」の到来と話題になった。五冠の獲得も早く、3か月後の王将戦で勝利し、史上最年少で王将を獲得した。

2023年3月、棋王戦で3勝1敗で勝利し、史上2人目の六冠を達成。藤井氏は活躍を続けており、挑戦権を獲得した6月の第81期名人戦で4勝1敗で勝利し名人を獲得。最年少名人記録の更新及び1995年当時の羽生善治氏（バイオナンバー224）以来2人目の七冠を達成した。さらに、2018年に叡王戦が加わり、現在の将棋タイトルは8つあるため、八冠の可能性も見えている。残るタイトルは王座で、これまで予選で敗退していたため、決勝にすら進めていなかったが、七冠を達成した今年には挑戦者になった。現在の王座は永瀬拓矢氏（バイオナンバー644）で、永瀬王座の防衛なら名譽王座の資格取得、藤井氏の勝利なら史上初のタイトル八冠独占となる。

注目の対局は五番勝負で8月31日〜10月30日を予定しており、31日の第1局は、永瀬王座が勝利した。第2局以降も目が離せない状態だ。

バイオナンバー442の人は、正義感や倫理観が強く、お金や時間の管理能力にも優れ、きちんとしなければ気が済まないタイプである。メリハリの利いた特性は、妥協を許さないため、完璧を目指して努力し続けられ、その道の頂点を極め、繁栄し続ける特性がある。数々の最年少記録を更新している点やタイトルを獲得し、八冠に手が届くところまで来ている藤井氏。こうした結果は特性が発揮されていることを物語っている。どのような成績を積み重ねていくのか今後も注目したい。